水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書　第１集

石田Ⅱ遺跡

１９９５

財団法人　水沢市埋蔵文化財調査センター

序　　文

平成５年11月に埋蔵文化財発掘調査と公開展示施設及び研修室等を兼ね備えた水沢市埋蔵文化財調査センターが胆沢城跡外郭南門前に建設されました。

今まで、市内の発掘調査は教育委員会で行ってきましたが平成６月４月より当センターが発掘調査はもとより考古学資料の展示、考古学研修講座等による啓蒙活動の推進を合わせ実施致しております。発掘調査に終わるだけでなくそれらの文化財のもつ貴重な意義について理解し保護しようとするそんな方向にセンターが機能すれば幸いであると考えております。

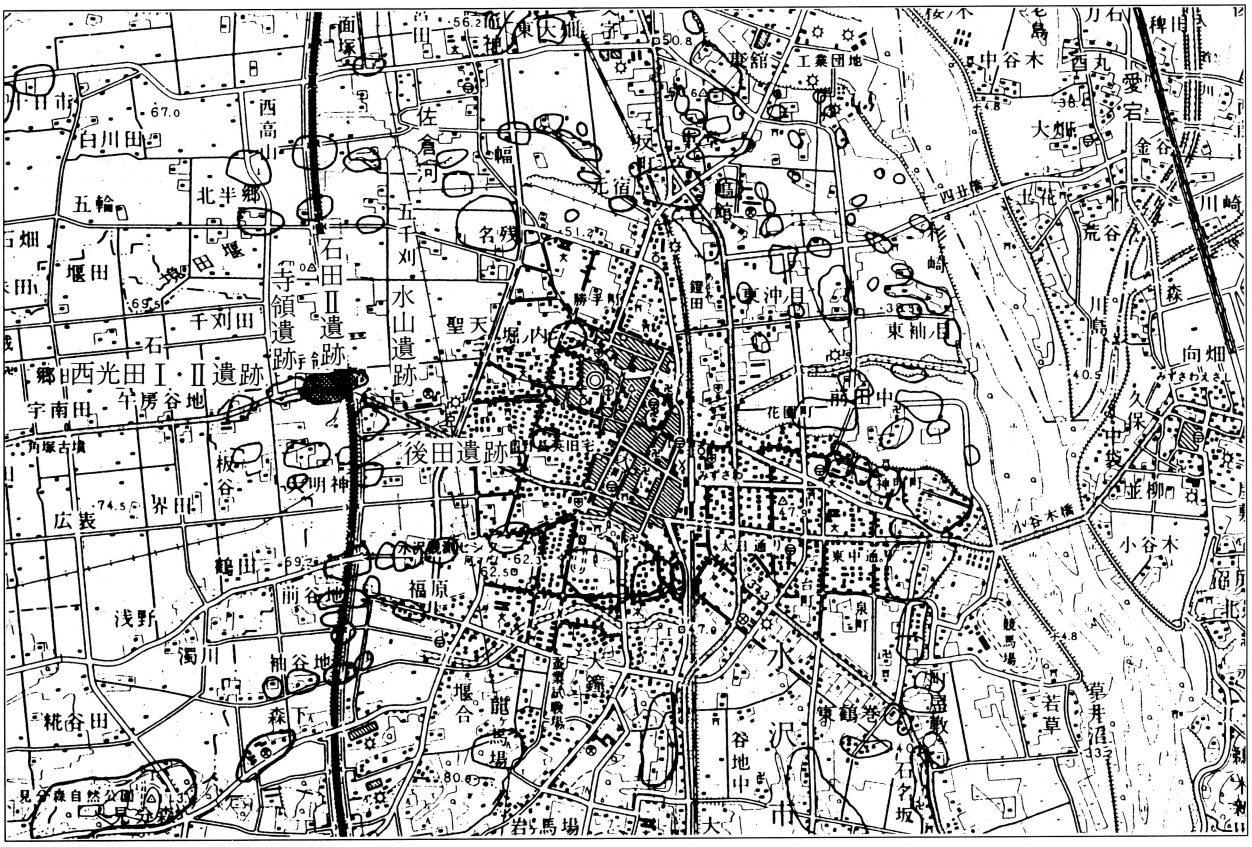
現在水沢市内には263か所の埋蔵文化財の遺跡が確認されております。更に、平成６年度には８か所を発掘調査致しました。(石田Ⅱ遺跡、中平館跡、熊之堂遺跡、姉体車堂Ⅱ遺跡、常盤小学校遺跡、跡呂井館跡、胆沢城跡、常盤広町遺跡) 胆沢城跡を除き７か所の調査は開発計画や個人住宅建設に伴うものであります。埋蔵文化財について従来の考え方は、「まず保護しよう」ということで推移してきたが、現在では「もっと積極的に活用し、整備していくことが必要である」というものに変わってきています。このような考え方にそって私どもは発掘調査にあたっております。また、そのような主旨のもとに消えゆく遺跡の記録を後世に伝える大事な責務を帯びた報告書であることを自覚し本書の作成にあたりました。

また、速報展により各遺跡の発掘状況や結果については、写真や図で、遺物は展示してお目にかけました。本報告書に掲載されている内容はそれらのものを更に詳細に記録保存したものであります。

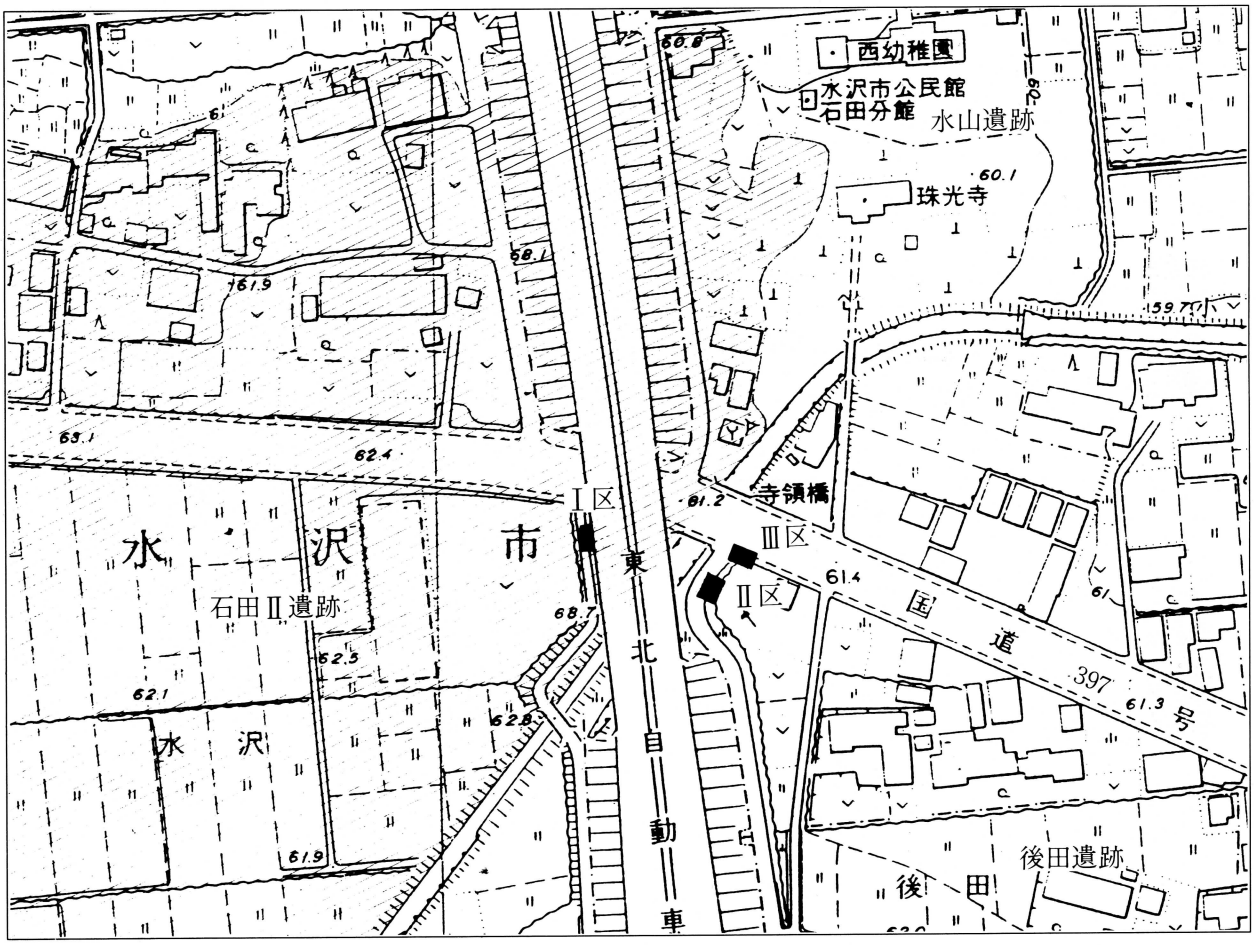
終わりになりますが、水沢市の埋蔵文化財保護行政の推進にあたりましては、今後とも一層の関係各位のご理解とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

平成７年３月25日

水沢市埋蔵文化財調査センター
所長　及　川　由　己



第１図　遺跡位置図（１：50,000）



第２図　遺跡周辺図（１：2,500）

Ⅰ　遺跡の立地と環境

水沢市の西方、谷底平野(沖積面)と接する水沢段丘の北縁部にあたる標高62～63m の緩斜面に位置する。遺跡南端を小違堰(乙女川)が北東へ流れる。

東北縦貫自動車道建設に伴い調査が行なわれた石田遺跡は、奈良時代から平安時代前半の竪穴住居跡46棟、掘立柱建物跡６棟が検出され、水沢市における古代の集落跡の一様相が明らかにされている(註１)。この段丘縁にはこのほか西方に寺領遺跡(註２)、小違堰を挟んで南東に後田遺跡等の古代集落跡が位置する(第１・２図)

今回の調査区はこの石田Ⅱ遺跡の南東端にあたり遺構の存在が推定されたため、ＮＴＴケーブル埋設工事に伴い事前調査を行なったものである。

補　注

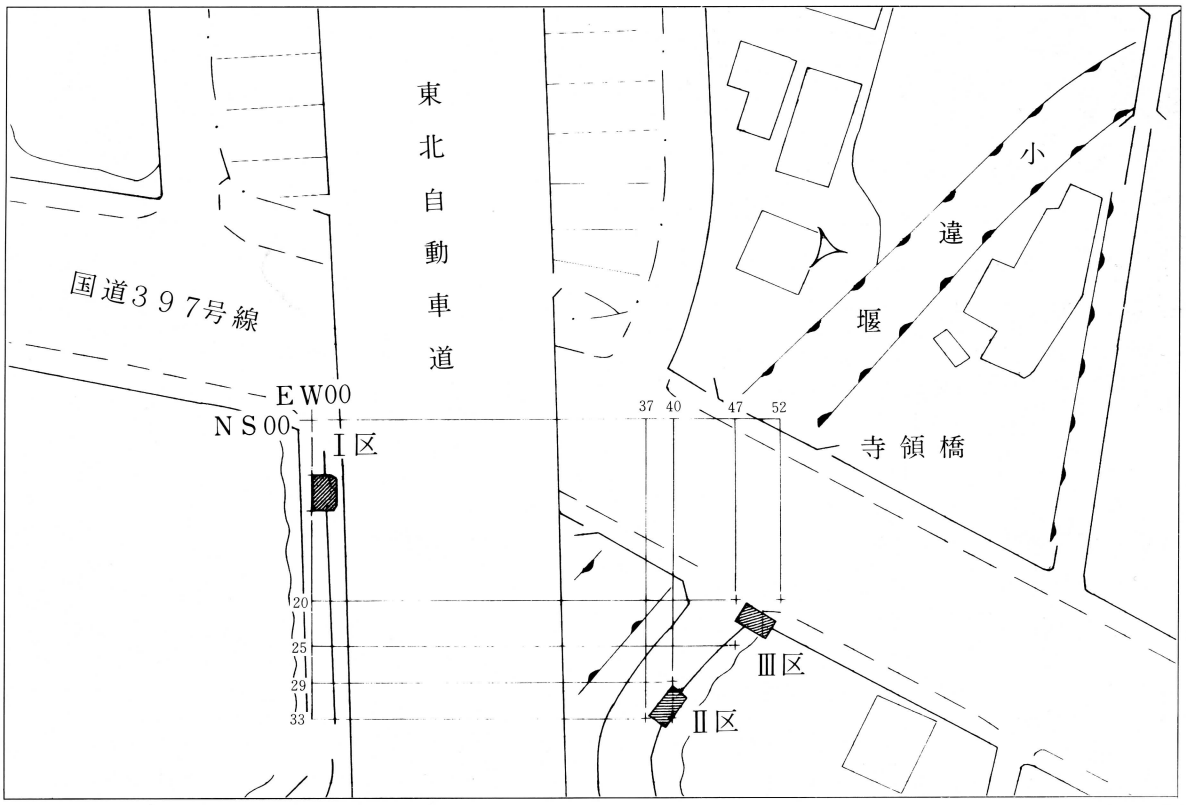
1　岩手県教育委員会「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅡ」『岩手県文化財調査報告書』第61集　1981年

2　水沢市教育委員会「水沢遺跡群範囲確認調査―昭和61年度発掘調査概報―」『岩手県水沢市文化財調査報告書』第16集　1987年

Ⅱ　検出遺構・遺物

本調査では３地区で調査を行なった。この地区は任意の点から以下のようにグリットを設定している。

各地の調査結果については以下に記す通りである。



第３図　グリット配置図(１：300)

Ⅰ区　旧河道跡

小違堰の約20m 西側に位置する。現路面下に層厚約 1.7m の盛土層があり、その下に旧河道跡堆積層がある。堆積層の層序は以下のとおりである。

第１層：黒色土(10Ｙ R2/1～3/1)層。粘性強く、若干炭化物・植物遺体含む。層厚約60cm。

第２層：黒色土(10Ｙ R1.7/1)層。粘性強く、若干植物遺体含む。層厚５～10cm

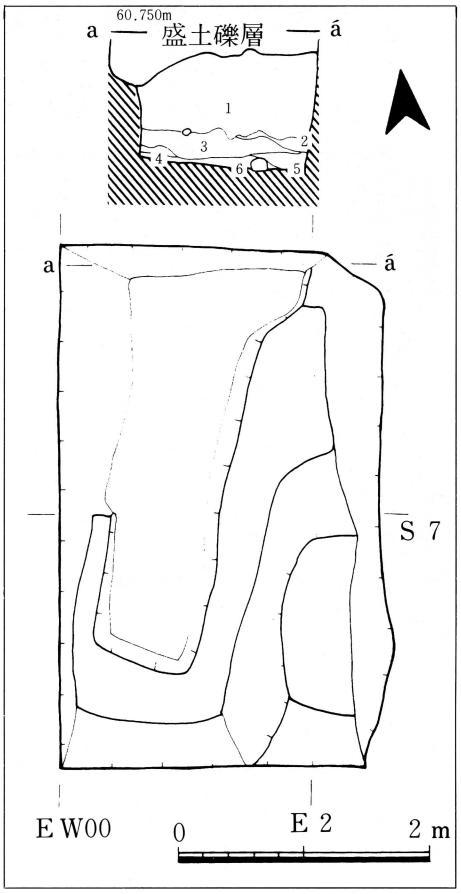
第３層：黒色土(10Ｙ R2/1～1.7/1)に細砂40%混じる。粘性弱く、若干炭化物含む。層厚約20cm。

第４層：オリーブ灰色土(2.5Ｇ Ｙ5/1)層。グライ化。粘性強い。層厚約５cm。

第５層：黒褐色土(10Ｙ R3/1)に細砂40%混じる。粘性弱い。層厚約12cm。

第６層：灰色細砂(10Ｙ4/1)層。グライ化。水が湧き出る。

層は流路底部(東側)に向けて傾きをもち、３層上層までアシなどの湿地性の植物遺体が入り込んでいる。調査区東側は大小礫の撹乱層である。



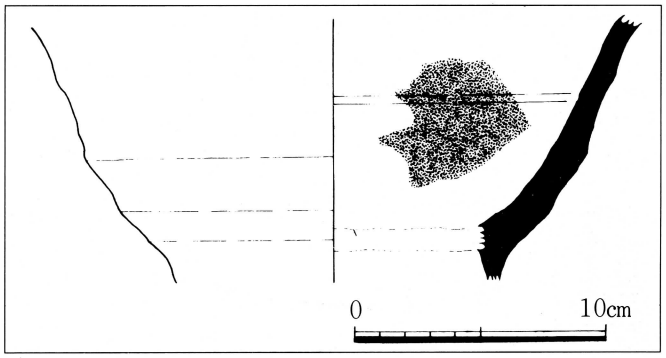
第４図　Ⅰ区実測図

出土遺物

遺物は、第１層から土師器片、須恵器片、馬歯が、第３層から中世陶器片が、第３層と第６層の境から土師器片、須恵器片が出土している。

中世陶器　鉢がある。

鉢　第５図は第３層から出土した中世前期(註１)のものと考えられる常滑の鉢体部片である。体部外面下部はヘラ削り調整を施す。内面には横方向に沈線が入り、漆の被膜が付着している。被膜部分は木口状の道具で掻き取った痕跡が認められる。



第５図　Ⅰ区出土遺物

(註１) 鎌倉市教育委員会　馬淵和雄氏、平泉町教育委員会　八重樫忠郎氏の御教示を得た。記して謝意を表す。

Ⅱ区　旧河道跡・石組遺構

Ⅱ区は、小違川右岸の市道脇に位置する。

Ⅱ区の基本層序は以下のとおりである。堆積土は１～４層は黒褐色を呈する水性堆積土層で、５・15・16層は主に砂・礫から構成される旧河床である。

また、川原石群周辺の堆積土層は東壁と西壁では若干異なるが、石組遺構構成層である７～９層は植物遺体を含み黒褐色を呈する。12・13層は川原石群の形成後の堆積層で、川砂・植物遺体を多量に含む黒褐色土層である。

第１層：黒褐色土(10Ｙ Ｒ2/2)層。粘性強い。炭化粒少量含む。

第２層：黒褐色土(10Ｙ Ｒ3/1)層。粘性強い。黄砂多量、炭化粒若干含む。

第３層：暗褐色土(10Ｙ Ｒ3/4)層。小礫(径1～10㎜) 多量、黄砂ブロック・炭化粒若干含む。

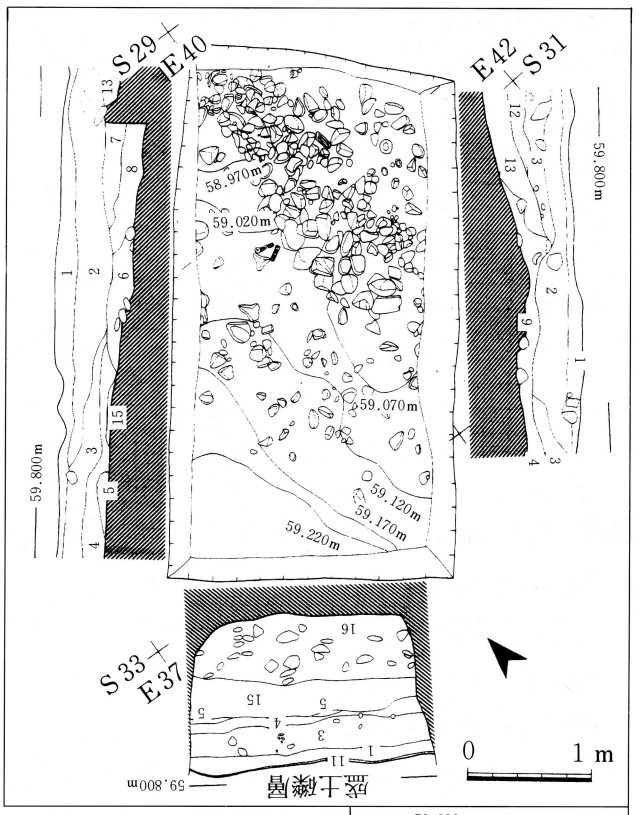
第４層：黒褐色土(10Ｙ Ｒ3/1)層。粘性強い。細砂多量混入。炭化粒若干含む。

第５層：オリーブ黒色(5Ｙ Ｒ3/1)粗砂層。径３㎜の小礫若干含む。

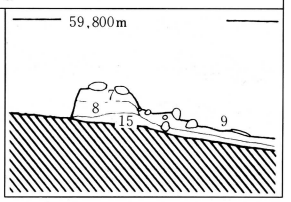
第６層：黒褐色(2.5Ｙ Ｒ3/2)混土細砂層。径５㎜の小礫・植物遺体を少量含む。

第７層：黒褐色(2.5Ｙ Ｒ3/2)粗砂層。粘性弱い。植物遺体・炭化粒若干含む。

第８層：黒褐色(2.5Ｙ Ｒ3/2)細砂層。粘性弱い。植物遺体多量、炭化粒少量含む。



第６図　Ⅱ区実測図



第７図　Ⅱ区石組遺構立割図

第９層：黒褐色(2.5Ｙ Ｒ3/2)混土砂層。植物遺体・小礫(径10㎜)多量混入。石組遺構構成層。

第10層：黒褐色土(2.5Ｙ Ｒ3/1)層。粘性強い。粗砂多量混入。

第11層：黒褐色土(10Ｙ Ｒ3/1)層。植物遺体多量に含む。

第12層：黒褐色(2.5Ｙ Ｒ3/2)混土細砂層。炭化粒・黄砂ブロック少量、植物遺体多量含む。

第13層：黒褐色(2.5Ｙ Ｒ3/2)混土砂層。細砂若干、植物遺体多量に含む。

第14層：黒色土(2.5Ｙ Ｒ2/1)層。粘性強い。

第15層：礫層・旧河床上層。礫(径１～５㎝)構成層。

第16層：礫層・旧河床下層。礫(径10～30㎝)構成層。

Ⅱ区では、小違川の旧河床と石組遺構を検出している。

調査区内の南壁と北壁では28.4㎝のレベル差が存在し、緩やかに南から北にかけて傾斜する。この傾斜に沿って流れていたと考えられる川の水を塞き止めるように石組遺構が形成される。

この石組遺構の立ち割りの結果７・８層の堆積を確認しており、７～９層の堆積後、石組に傾斜を付けるため下流の北壁付近では７・８層を掘り込んで川原石を人工的に敷設したと考えられる。

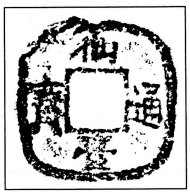
この石組遺構の性格としては、梁場的な施設あるいは足場等が想定される。

出土遺物

紐を通して括った状態の仙臺通寶約 100枚が検出された。仙臺通寶は砂層中に埋没した状態にあったと考えられ、全体の遺存状態は良好であった。

仙臺通寶は、仙台藩が天明４(1784)年に領内限り通用の条件で幕府から許可を得て鋳造した銅銭である。脆くて砕けやすい悪銭であり、鋳造許可年限の５年を待たず天明７(1787)年には鋳造を中止している。

このため今回検出した仙臺通寶も破砕しているものが多く、個体として把握できる検出枚数は約100枚であるが、実際にはこれ以上の銭が括られていたと想定される。



第８図　出土遺物

仙臺通寶は、県内では他に一関市大平遺跡(註２)、金ヶ崎町雛子沢遺跡(註３)等の近世墓地から出土している。このほか、平安時代の甕片、江戸末～明治期の染め付け破片・土師器細片を検出している。

(註２) 工藤　武「大平遺跡」『一関地区遊水地関連埋蔵文化財発掘調査報告書』1985年

(註３) 千葉周秋「雛子沢遺跡」『岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書』第19集　1990年

Ⅲ区　旧河道跡

国道397号線南側、市道との交差部分の東側に位置する。調査区の北西部分は橋の基礎となっており、実際に調査が可能であったのは全体の約１／２である。調査区北側は緩やかに北に向かって落ち込んでいる。

本調査区の層序は以下の通りである。

第１層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト：軟質で粘性強く、緻密。細砂若干、植物遺体と見られる炭化物多量混入。

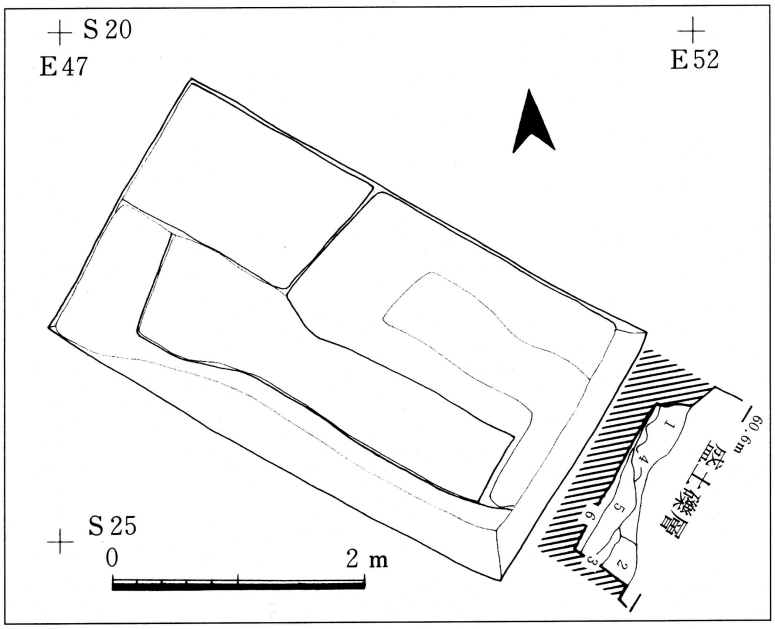
第２層　撹乱礫層。

第３層　４層より黒味がかる黒色シルト：やや固く締まり、粘性強い。下層は、一部に細砂10%混入。

第４層　黒色(10YR2/1～1.7/1)土層(漸移層)：細砂40%混入。軟質で粘性ほとんどなし。

第５層　黄灰色(2.5Y4/1)細砂層：やや軟質で粘性なし。上層ににぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する砂層混入。

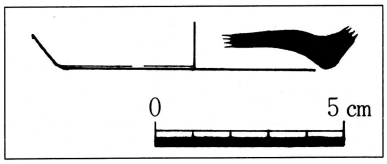
第６層　黒褐色(2.5Y3/2)粗砂(砂利)層：軟質だが粘性なく、脆い。湧水層。



第９図　Ⅲ区実測図

出土遺物

遺物は、近世のものと考えられる底径 7.4cmの素焼きの鉢もしくは小鉢底部片である。底部外面は高台を削り出している。



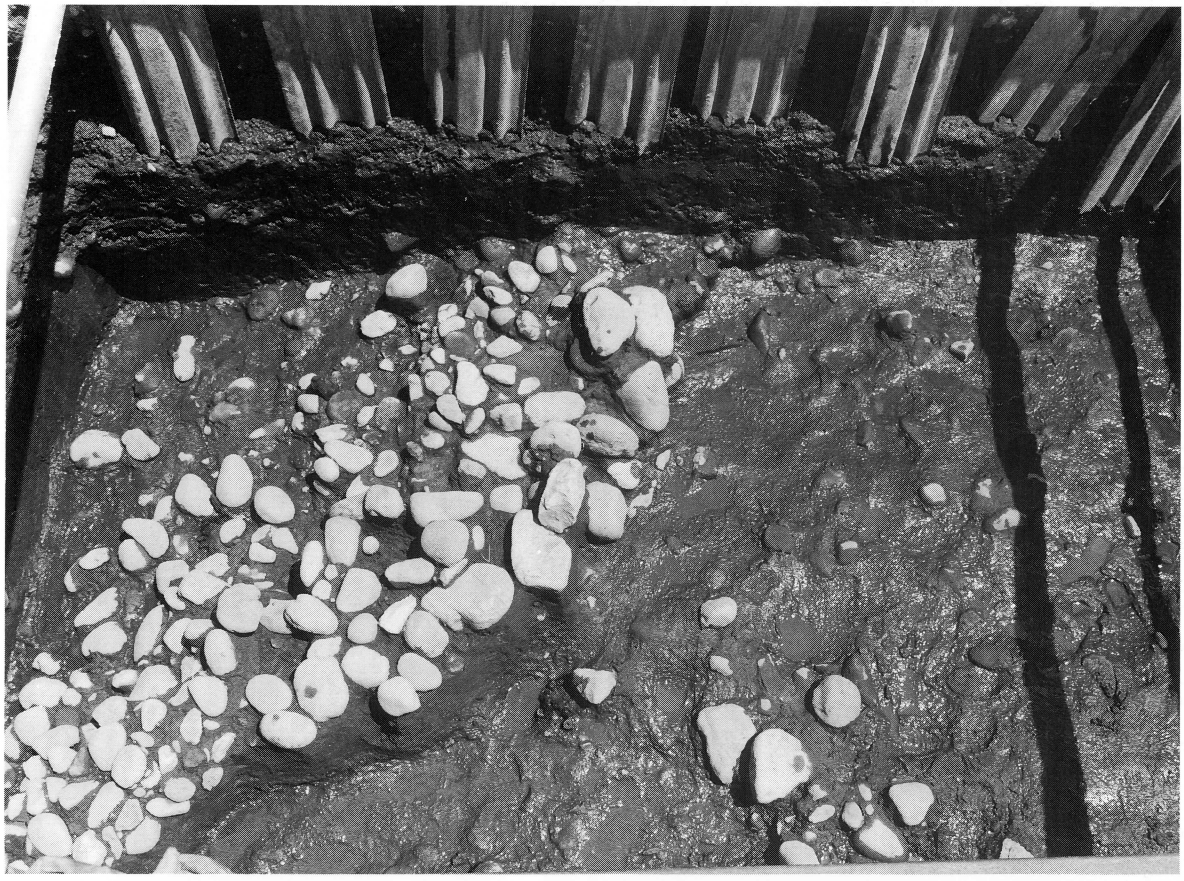
第10図　Ⅲ区出土遺物

Ⅲ まとめ

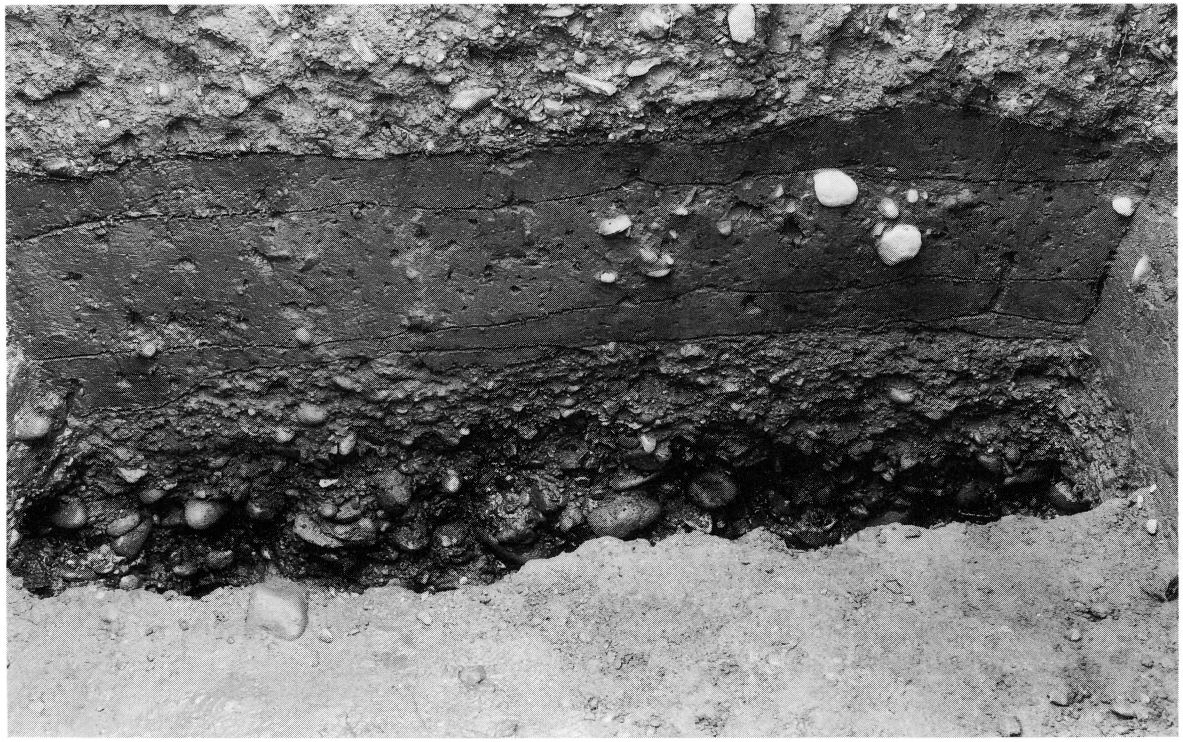
小違川は、現在は両岸の整備により直線的に流れているが、地元の人々の話では30～40年ほど前は曲がりくねった流路であったということである。今回の調査結果からその様相は江戸時代にまで遡ることが明らかとなった。Ⅱ区で検出された石組遺構は、この時期の人々の小違川の利用状況を伺うことが可能な遺構である。また、Ⅱ区から検出された仙臺通寶は、石組遺構に接して検出され、しかも紐で括った状態にあったことから、地鎮等に伴う埋納物といった意味合いが想定される。

Ⅰ区からは中世前期の常滑鉢片が出土しており、周辺に該期の遺構の存在が予測される。従来の分布調査では、中世に属する遺跡は知られておらず、今後の調査に課題を提起した。

図版１　上　Ⅰ区全景(南から)
　　下　Ⅱ区全景(南から)



図版２　上　Ⅱ区全景（西から）
　　下　石組遺構立割状況

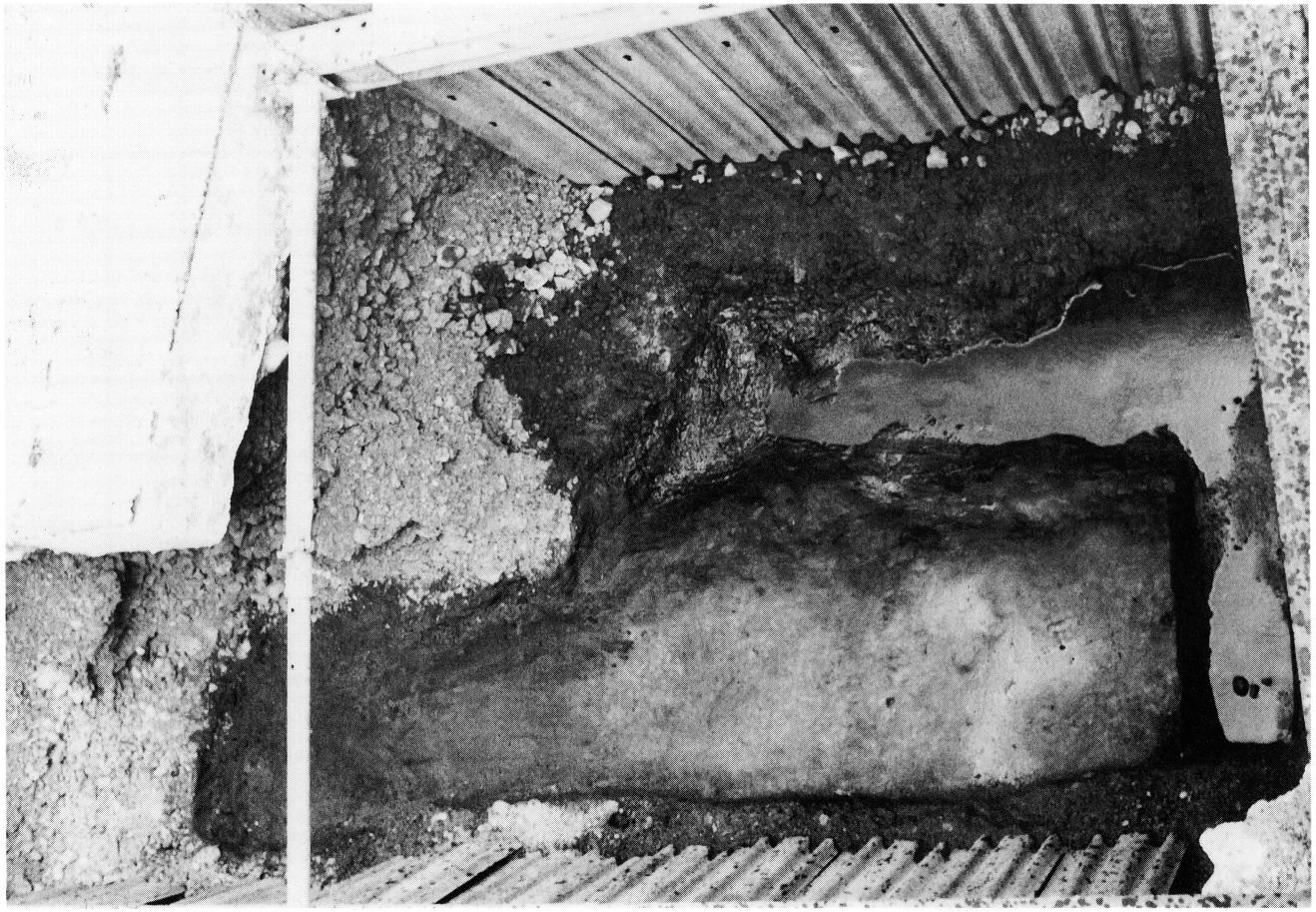


図版 3

上　Ⅱ区東壁断面図（西から）

下　Ⅱ区南壁断面図

図版 4　上　仙臺通寶検出状況
　　下　仙臺通寶近景



図版５　Ⅲ区全景（南から）

水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第1集

石田Ⅱ遺跡

平成7年3月31日発行

発行者　財団法人 水沢市埋蔵文化財調査センター
〒023　岩手県水沢市佐倉河字九蔵田96-1
TEL 0197(22)4400　FAX 0197(22)4600

印刷所　有限会社 あ べ 印 刷
TEL 0197(24)8303　FAX 0197(24)8330